

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

01

石川淳

椎名麟三

「上巻」

目次

翻刻で甦る声、時代

亀山郁夫

4

資料写真

石川淳日記

〈昭和25年1月1日―昭和26年12月31日〉

9

椎名麟三講演メモ ①

13

戦後派文学と世田谷

18

紅野謙介

「石川淳日記」

一九五〇・一九五一年分について

24

山口俊雄

資料翻刻1

石川淳日記

〈昭和25年1月1日―昭和26年12月31日〉

35

資料翻刻2

椎名麟三講演メモ ①

75

石川淳／椎名麟三 主な収蔵資料一覧

109

翻刻で甦る声、時代

亀山郁夫

石川淳「日記」及び椎名鱗三の「講演メモ」の翻刻をここにお届

けする。翻刻の出版は、本文学館が立ち上げる新事業の一つであり、今後、この方向性を維持しつつ、本館の持てる可能性を将来の日本文学研究に役立てるべく大事に育てていきたい考えである。

石川淳をめぐる私の記憶は、学園紛争の嵐が吹き荒れる一九六〇年代の終りにまで遡る。その名は、全共闘シンパサイザーにとっては頼もしい支えとなったが、私のようなノンポリ学生の中には、いささか胡乱な、煙たい存在と映じた。当時、そうした石川の思想性を如実に示す作品として『天馬賦』（一九六九）が話題を呼んでいた。だが、そこに描かれた「学生運動」の型破りなパロディのみならず、石川の、和洋漢に通じる知性のありやそのものが、激動する時代の空気にどこかなじまないという雑駁な印象を私は抱いていた。もともと当時、私自身、アンドレ・ジッドという、周囲の友人からはほとんど一顧もされることのない作家に熱中していただけに、かりに日本におけるジッドの草分け的な紹介者ということについていくばくかの知識があったならば、先に述べたような石川の印象はかなり違ったものになっていたかもしれない。それから瞬く間に二十年が過ぎ、大学のゼミでいちど『焼跡のイエス』を取り上げる機会があったが、とくにこれといった感慨を覚えることもなく、そのままさらに二十五年の月日が流れた。そして今回、本文学館が所蔵する「日記」が翻刻されるのを機に再挑戦を決意し、改めて手にとった作品が『紫苑物語』

だった。

和漢洋とりまぜての豪勢な食事にも似た、幸福なひと時を味わうことができた。微妙なリズムの変化をはらんだ擬古文による語り、山岸涼子を彷彿させるロマネスクの美の世界を現出している。何より、現代人の心にも深く通底するニヒルな死生観に胸を衝かれた。

だが、石川の数ある小説からまさきに『紫苑物語』を選んだ理由は、別にあった。昨年九月に急逝した作曲家、西村朗氏とのつかの間の語りである。ある新聞社の企画による同氏との対談の席上、西村氏が最近、指揮者の大野和士と組んで、『紫苑物語』のオペラ化を実現させたことを知った（新国立劇場）。後日送られてきたDVDを貪るように鑑賞しながら、私はとても誇らしい気持ちになった。西村氏の、鮮烈でかつドラマティックな音楽作りも文句なしのオリジナリティである。しかしそれに負けず劣らず奥深い内容をもつオペラの素材が日本にもある！

2

石川淳「日記」は、大学ノートを縦に見開きにし、罫線に沿って書き記されている。「書は体を表す」とは、このことを言うのだろうか。読者はまず、石川のペン書きの流れるような美しさに、江戸っ子らしい粹と潔さ、そして繊細優雅の限りを見てとるにち

がない。

時代は、昭和二十五年元旦から翌年大晦日までの二年間。この時期、日本社会は、折からの朝鮮戦争による特需景気に沸き立ち、戦後の混乱を脱して、高度成長期の前触れを予感させる一種独特の明るさに包まれていた。すでに五十代に足を踏み入れた石川は、雑誌「新潮」に『夷齋筆談』を連載中であり、心身ともに充実の境地にあったことがペン書きの筆勢からも窺える。

「余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず茫茫然として白昼の夢にふける 笑ふべきのみ」(昭和二十五年九月三日)

今回、翻刻を手にし、第一に興味をそそられたのは、何より石川の交友の広さである。チェスに例えるなら、キング格の三好達治、小林秀雄から、ルーク格の大岡昇平、ビショップ格の三島由紀夫、安部公房にいたるまで、詩人、作家、批評家、編集者らが盤上に浮かんで消えていく。まさに壮観というしかない。しかしその壮観も、小料理屋「はせ川」やクラブで顔を合わせる文壇人に限られることはなかった。二十歳代の若さで、アナトール・フランスやアンドレ・ジイドの翻訳者となった石川だが、職業作家として自立したのちも世界の文学に対する関心が止み途絶えることはなかった。「日記」では、ジャン・コクトー(『演劇』、アルベール・カミュ(『ペスト』『シジフォスの神話』)、J・P・サルトル(『シチュアシオン』)、ポール・ヴァレリー(『芸術論』)、ポール・クロデル(『眼は聴く』)、モーリス・ブランショ(『死の宣告』)らの巨

らいに紛れて、忘却されていたということだろうか。

本「翻刻」を手にした読者は、石川の酒癖に例外なく気をもまされるはめに陥る。執筆にあてる時間をどこに見出していたのか、と老婆心ながらも心配になるほどである。深酒への嫌悪に時として胸がうずくことがあったのか、「連夜の酒に疲れたり」「大酔戒しむべし 帽子をどこかに落としたり」「わが生活のみだれわれながら目もあてられず」などの自嘲が散見される。そうはいえ、銀座「はせ川」での出会い、語らいこそは、彼の作家としてのエネルギー源の一つだったことにおそらくまちがいはなく、「生活のみだれ」という自戒は、それこそヴォアイアン石川の好奇心の産物でもあったのだろう。端正なペン書きの文字は、いざれこの日記が他者の目に触れるときを作家が覚悟していたことを物語っているが、彼自身は何ひとつ怖れるふうもなく、交友にまつわる私的な(時として若干危険な)事実を淡々と書き記している。ストリップショー見物やトルコ風呂の経験についての記述にも曲がったこだわりはなく、事実に対してどこまでもドライであろうとする無頼派作家らしい潔さがそこに見てとれる。思うに、その誠実さは、昭和二十六年大晦日の記録がよく示すところでもあった。「かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し 売文の毒おそるべし 意あまつて才足らずることをかなしむ」

匠たちに交じって、メルヴィル(『白鯨』)、フォークナー(『サンクチュアリ』)らアメリカ人作家の名前も見え隠れする。また、当時彼が目にしたハリウッド映画(『イヴの総て』『レベッカ』『白い恐怖』)も興味深く、彼の作品やエッセーの背景を知る上で貴重な情報をもたらしてくれる。

昭和二十五年といえば、太宰治の死が、いまだ人々の心に濃い影を落としていた時期でもある。なんだか酒席をともにした太宰への思いは深く(エッセー「太宰治昇天」)、六月に三鷹禅林寺で催された第二回目の桜桃忌にかんする短い記述が目を引く。太宰の妻、津島美知子からは、形見分けとして結城紬のネクタイをプレゼントされた。こうして大小の作家、詩人、批評家、編集者らとの交友から浮かびあがるのは、狷介孤高という一般の印象とは異なる、江戸っ子ならではの石川の親分気質、人情の篤さである。

同時代の西欧の音楽に対する好奇心も注意を引く。東京っ子としての特権を余すところなく享受する石川の姿がそこにある。当時、日本のピアノ教育界にも一定の影響を与えたユダヤ人ピアニスト、ラザール・レヴィ、戦後初の大物演奏家の来日として話題を呼んだ、ユードイ・メニューヒンによる伝説的な演奏会への言及は、石川の研究者、一般の愛読者にとっても得難いディテールではないだろうか。ただし惜しむらくは、これらの演奏会に関する印象なり、コメントなりが総じて淡泊なことである(「ただ日響オーケストラの拙なるを憾む」。多くは演奏会後の酒席での語

3

椎名鱗三の講演メモについてもひと言述べておこう。

椎名は、石川と同じく大学ノートを縦に使用し、罫線上に鉛筆で彫り込むように書き込んでいった。石川とまさに好一對をなす原稿とあってよい。「講演メモ」としてタイトルが付されているのは、五編(「戦後文学の意味」「文学する心」「自由と倫理」「人間の自由について」「作家と生活」)、その他、タイトルのない「講演メモ」が十編収録されている。年月日はそのほとんどが不詳であり、それらの空白は将来の椎名研究が埋めてくれることを期待する。

さて、計十五の講演メモのなかで私がとくに注目したのが、「自由と倫理」である。椎名はどの講演でも、みずからの苦難に満ちた来し方を外連味なく語っているが、そうしてみずからの過去を語りつぐなかでつねに念頭にあったのが、「真の自由とは何か」の問題だった。「自由」をめぐる議論は、時として堂々めぐりの観を呈することもあったが、最晩年の『懲役人の告発』において、彼なりに結論に辿りついたと私は考えている。そして、今回、「自由と倫理」の講演メモを手にし、私の理解に大きな誤りがなかったことを確信することができた。講演メモ「1. 泥棒の話」で椎名は、ドストエフスキーが『白痴』のなかで言及したロシアのとある田舎町の事件に触れている。旅仲間の一人が相手の所持す

資料写真
石川淳日記

昭和25年1月1日
昭和26年12月31日



本日記が書かれたころ、高輪の石川邸にて安部公房と。撮影：沼野謙

る時計に目をつけ、十字を切り、祈りを唱えてから相手を殺し、時計を強奪した実話である。椎名は講演で、この「泥棒」をわが身に重ね、驚くべき告白を行った。

「十字を切つて泥棒をしたという彼の行為は、矛盾でありましよう。しかし私は、この彼が大好きなのであります。この彼が、十字架の前でふるえながら罪をおかしつづけている人間という存在のイメージが鮮烈な姿で描かれているという点においてでなく、この泥棒は、ほかならぬ私自身でもあるということなのであります」(傍点筆者)

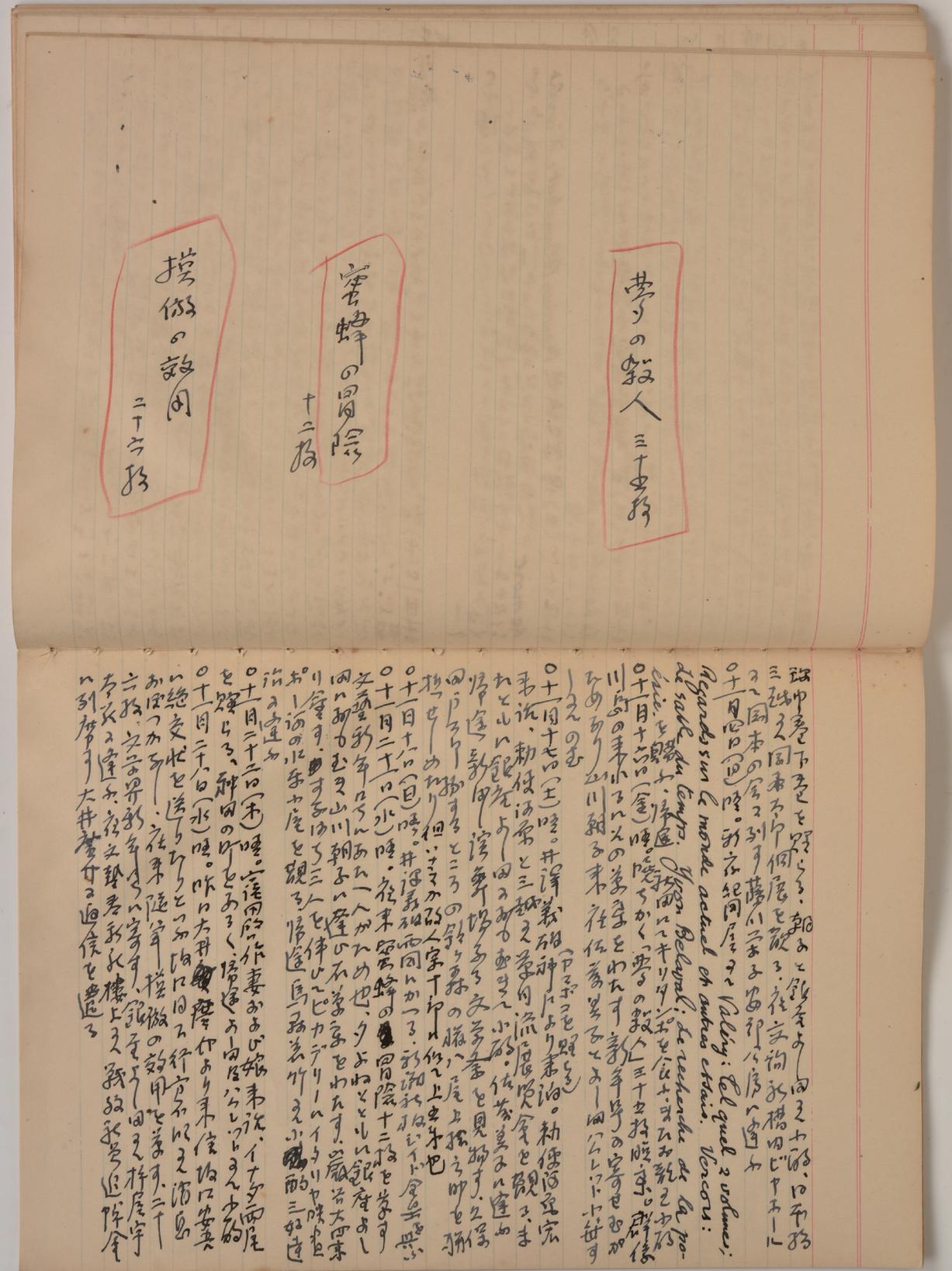
「人間の自由というものは、罪である仕方ですか、もつことができないということができると思います。つまり人間の自由は、罪である。しかし私は、この罪であるところの人間の自由はどこまでも同意をあたえ、心から愛したいというのが、私のキリスト者の、文学者としての立場なのであります」

この二つの引用には、作家椎名の重要な告白が隠されている、と一言述べておく。『懲役人の告発』についても言えることだが、「自由と倫理」、いや、自由と禁忌の境界線上を歩む作家の隠された内面が吐露されているということである。その意味で椎名は、広く一般的な意味でのキリスト者というより、親鸞の悪人正機説すら想起させるドストエフスキの、いつてみれば、罪の宗教とでもいうべき思想の殉教者だった。自由を否定し、自由を肯定する、その曖昧さのうちに自由の奥義はある、と椎名は訴えたかったのではないか。この「講演メモ」は、講演という、開かれた、対話の場に臨んで、より説得的であろうとした椎名が、思いもかけずみずからの内面に隠された「自由」の意味に遭遇した稀なる機会だったと見ていい。少なくとも私にとって、講演メモの翻刻が持つ意味はここにきわまる、といっても過言ではない。

(世田谷文学館館長・ロシア文学者)



上 1955年11月26日、国学院大学での講演風景（本誌掲載の講演メモ「戦後文学の意味」と同講演かは不明）
 下 1955年11月12日、法政大学での講演風景



文学する心

私は、中世後でお話するのは、はじめでないので、...

椎名麟三 講演メモ「文学する心」(1枚目)

文学する心

文学する心は、日取初、ころころ日本地と云ふ...

椎名麟三 講演メモ「文学する心」(4枚目)

戦後文学の意味

- 一、戦後文学の定義
二、戦後文学の歴史
三、戦後文学の動向
四、戦後文学の意義
五、戦後文学の展望

椎名麟三 講演メモ「戦後文学の意味」

自由と倫理 (第一日)

私は、杉原助之助の依頼によつて、この修養会の講演を引受けたいのでありますが、...

椎名麟三 講演メモ「自由と倫理(第一日)」(1枚目)

